



土、種、作物に愛される

(公財) 自然農法国際研究開発センター

理事長 伊藤 明雄



本年6月、当センター編の『自家採種コツのコツ（農文協）』という本が出版されました。ご承知のように当センターは、自然農法種子（品種）の開発と普及に長年取り組んでおり、これまでの自家採種の研究と情報を基に、失敗しないポイントと手順を作物ごとに写真つきで解りやすく解説しています。

自然農法の創始者岡田茂吉は、世界の三大災厄たる「病気、貧乏、争い」を根絶し、「健康で、豊かで、争いのない世界」を建設すると宣言し、その手段の一つとして自然農法を提唱しました。作物生産の中にも「様々な病気」があり「土壌の劣化や養分欠乏などの貧乏」があり、「様々な虫や雑草との争い」があります。

農業の世界にも存在するこの

「病気、貧乏、争い」を無くすには、自然界にその答えがあり、「自然界に備わる、健康、豊かさ、調和の法則」を学び、その法則を農業技術に応用することを説きました。特に「土」にはその能力が凝縮されており、「土は肥料の塊」であり「土の偉力を発揮させる」ことが作物生産の原理であるとも説いています。

私も、土を生きものとして捉え、健康な作物を生産するすばらしい技術者と考えています。その能力をいかに最大限発揮させるかということとを根底にしながら農業技術を考えます。農業一般では以前から「土づくり」と称して、堆肥などの有機物の投入や資材による土壌改良を行ってきました。

私も、さらに自然のし

くみに合わせて植物根や土壌生物が働きやすい環境を整え、土が変化していく過程も視野に入れて「育土」と呼び、重要な栽培技術要件として位置付けています。そして、土には、汚染されたものや化学物質は使用しない、有機物を投入する時は適度な量と品質の良いものを使用する、太陽光と空気と水のバランスを

考えるなどを注意点に、土に愛情を注ぐことよって、土の中に存在する多くの土壌生物などが働き、「土を柔らかくする耕耘力」「養分を蓄積する肥沃力」「汚染をきれいにする浄化力」「温度や湿度、土壌の性質を調和する調和力」を発揮して、ローコストで高品質な作物生産が可能となってきました。

もう一つ重要なものが種子

(品種)です。私も、日本の風土で育まれた固有の品種を大切にし、化学肥料や農薬に依存しない自然農法産の種子を育てています。自然農法で育てられた品種は、根張りがよく、病虫害にも強く、肥沃でない土地でも育ちやすく、採種性にも優れています。今回出版しました本を多くの皆様にご愛読いただき、有機農業の技術の一つとして、また、日本の貴重な財産である種子(品種)が後世に引き継がれる営みの一助になれば誠に幸いに存じます。

本年4月に発生した熊本地震において被災された皆様からお見舞いを申し上げます。熊本市に隣接する玉名市も少なからず被害に遭いましたが、この玉名市では数年前

から保健センターが中心とな

り、市民の健康づくりの一環として、自然農法種子を活用した無農薬の元氣野菜作りを市民と共同で取り組んでおり、市民の健康状況が改善しているとのことです。毎年11月には「たまな食育フェア」が開催され、市民参加の様々な催しが行われており、その一つに元氣野菜の試食も行われ、食育の教材となつています。本年は、昨年自家採種したニンジン栽培しているとのことで、その成果が楽しみです。

この玉名市保健センターの健康づくりの取り組みは全国的にも稀有な事例で、こうした取り組みが広がっていくことを願っています。